

## 凡事徹底

埼玉県 越谷市立南中学校 2年  
亀山 陽人 (かめやま はると)

僕は中学でサッカーチームに所属している。サッカーチームでは、凡事徹底を指導されている。挨拶や礼儀など当たり前のことを行なうということだ。小学生の頃は少年団サッカーをやっていて、その頃は、スポーツをやる上で大切なこと（チームメイトや相手チームに思いやりを持つこと、勇気をもって挑戦すること）を教わってきた。

去年、サッカーチームで練習試合をした時のことである。当時一年生だった僕らも、順番に試合に出してもらった。チームメイトにはガーナからきた外国人の仲間がいる。彼はとても足が速く、体幹が強い。その彼が出場した際、相手選手に強いプレッシャーをかけ競り勝っており、僕たち仲間は

「さすがだなあ。体強いな。」

と誇りに思っていた。しかしフィジカルで彼に負けた相手選手が、試合終了後、僕たちに聞こえるような大きな声で、外国人の彼の出身を差別するような表現を使って、悔しまぎれの発言をしたのだ。

その言葉を聞いて、僕は全身がカッと熱くなった。怒りなのか悔しさなのか分からなかつたが、感じしたことのないいらつきだった。彼にも聞こえていたはずだ。彼は黙っていた。気にしていないように振る舞っているようにも見えた。相手選手は年上だったし、僕らはまだ一年生だったので、勇気がなくてその場で反論することができなかつた。情けなかつた。

家に帰ってもいらいらしていた。何があったのかと母に聞かれても、すぐにはうまく言葉にならなかつた。母に言わせるとその時の僕は真っ赤な顔をして下を向き、怒ったような泣いているような様子で、何か深刻なことがあったのだろうかと思ったそうだ。考えるほどに悔しさがこみあげた。彼は僕らの大切な仲間だ。小学四年生で初めて日本に来て、世界一難しい言語の一つと言われている日本語を努力で学び、毎日冗談を言い合えるようにもなつた。心からすごいと思っている。僕は中学校で英語に苦戦しているので、なおさらだ。そんな彼に対する差別的な発言に、僕は何も言い返せなかつた。改めて考えると、明らかな悪意

や差別に直面したのは、その時が初めてだった。

彼からすれば、僕たちこそが外国人だ。今いる場所が日本だというだけで、彼はここでは外国人なのだ。それなのに、生まれた国籍や肌の色で、差別的な行動や発言が許されるわけがない。それを正すのは、当たり前のことははずだ。僕たちは、当たり前のことを徹底するということを教わっているのではなかつたか。小さい頃から、思いやりを持つことを教わってきたのではなかつたか。間違つた発言だということは分かっていたのに、チームメイトのために言い返せなかつた自分に、大きな後悔が残つてしまつた。

今、日本はもちろん、僕たちの学校でも外国人の友人が増えている。彼らはこの日本で、差別的な体験をしていないだろうか。傷つくことはないだろうか。自分自身、日本語が通じない相手や肌の色が違う相手を、日本人相手とは違う目線で見ていないだろうか。僕は背の高い外国人を見かけると、

「かっこいいなあ。やっぱり外国人は背が高いなあ。」

と思う。単純に憧れる気持ちからだ。しかし僕が抱くその感想は、その外国人にとって差別的ではないと言えるのだろうか。「やっぱり」という表現に、偏見が含まれていると思う人もいるかもしれない。受け取り方は相手次第だ。自分の口から出る言葉は、出てしまつたら取り返しがつかない。無意識に抱く感情は思い込みを招く。自分自身の発言や思いを見つめ直し、振り返ることが必要だと思った。そして自分以外の誰かの言動でも、間違つていると思うことは、きちんと意見を伝える勇気を持たなくてはいけない。正しいと思うことを貫かなければならぬ。

相手に対して思いやりを持つこと、一歩を踏み出す勇気・挑戦する勇気を持つこと。それが当たり前になるように。凡事徹底だ。